

一八五七年恐慌(四)

三宅義夫

九

マルクスは一八五四年末から一年ほどの間『ノイエ・オーデル・ツァイトゥング』——「ドイツの田舎新聞(Winkelblatt)」(一八五四年十二月二日付エンゲルス宛のマルクスの手紙)——のロンドン通信員となっていたが、一八五五年はじめに「商業恐慌(Die Handelskrise)」と題して四回にわたる通信を寄せた(一八五五年一月八日、九日、十六日、二十三日付、『N・O・Z』一八五五年一月十一日、十二日、十六日、二十五日号所載、Gesammelte Schriften, Bd. I, S. 89—97、改造社全集訳、第七巻、二〇—八ページ、大月選集訳、第六巻、三三九—五〇ページ。なお、マルクスはしばしば、『ノイエ・オーデル・ツァイトゥング』に寄せた通信とはほぼ同じものを『ニューヨーク・トリビューン』に英文で送ったが、この商業恐慌も“The commercial Crisis in Britain”と題して『トリビューン』の一八五五年一月二十六日号に無署名で載せられている由——Gesammelte Schriften, I, S. 500. また M. Rubel: Bibliographie, p. 115——)。ここにこの「商業恐慌」について見てみよう。

冒頭マルクスは、「当地のクラブや新聞雑誌は『内閣の危機(ministerielle Krisen)』『セヴァストポルの戦況から当時

アバディーン連立内閣は議會において瓦解の危機に陥っていた。そしてこののち二月はじめ、アバディーン内閣は辞職し第一次パーマストン内閣が成立した」にかんしてもったいぶったおしやべりをさかんにやっているが、それと比較にならぬほど重大な事業、すなわち、大きなイギリスでの産業および商業恐慌〔商工業恐慌〕の一つがふたたび、しかも一八四七年や一八三六年よりもっと有害な広がりにおいて、突入してきている (eine der großen englischen Industrie- und Handelskrisen wieder hereingebrochen ist, und in unheilvolleren Dimensionen als 1847 und 1836) ところが事実を認知するいとまがなくている」とし、「破産が三ヵ月以来散発的におこっておりまた最近その数と強さを増しているのにこうした「突入してきているという」認識を生み出しえないでいたが、年次商況報告書および商務省発表の最近十一ヵ月の輸出入表の公表の結果、この認識はついに拒みえないものとなった」云々と述べている(傍点および「」内三宅、以下同じ)。

このように一八五五年のはじめにおいて、マルクスは、イギリスが「大きな産業および商業恐慌」に「突入してきている」とし、新聞雑誌はまだこの「事実」を「認識」していないが恐慌はすでに生じているのだといっている。なおここで、「破産が三ヵ月以来散発的におこっており」と記しているが、この「三ヵ月以来」という点については、のちに見るように一八五五年三月二日付の論文のなかでも、「商業および産業恐慌〔商工業恐慌〕、これは昨年の九月以来日ごとに強力性および普遍性をまわしてきている」とし、また「……九月末ごろにはその影響はここイギリスにおいても感じられるようになった」云々と述べている。

論文「商業恐慌」は右につづいて、商務省発表の輸出入表によると「輸出」は十二月五日に終る十一ヵ月間において一八五四年には五三年に比して一、七一〇、六七七ポンドほどの減少を示しているとし、また「若干のもっとも重

要な産業部門」——綿製品、綿糸、亜麻製品、亜麻糸、羊毛製品、絹製品、機械輸出——についてそれぞれ一八五三年、五四四年の輸出額を掲げ¹⁾、ついでつぎのように述べている。「商況報告においては、もちろん、一八五四年の恐慌の責任を戦争に負わせようと試みられている。これは、すでに一八四七年に勃発していた恐慌の責任が一八四八年の革命に負われたのとまったく同じである。だがこんどはロンドン・エコノミスト——原則として恐慌を、偶然的な、商工業と関係のない諸事情から説明するのを慣わしとしていているところの——でさえも、一八五四年の商業上の災難や減退 (Unfälle und Ausfälle) は、一八五三年の「瘡癥的な繁栄 (konvulsivische Prosperität)」にたいする自然な反動のはじまりであると告白することを余儀なくされている。いいかえれば、商業上の循環は、過剰生産と過剰投機とが恐慌に急変する点にふたたび到達しているのである。「ここではさきの「大きな恐慌がふたたび突入しつつある」という「認識」とはすこしちがつて「恐慌に急変する点にふたたび到達している」と記していることは、注意をひく」。もっともよい証拠は北アメリカ合衆国——この国にたいする東方戦争の影響は、戦争によって同国の船舶建造と船舶販売とが未曾有の隆盛を来たし、以前にはただもっぱらロシアだけが供給していた種々の原料品について同国にとって販路が開かれた、ということだけであった——である。この合衆国において、恐慌はいまやすでに四か月以上つづいており、そして——四千二百八の銀行のうちすでに百九がつまり約二パーセントが破産し、また産業のいちじるしい停滞は、東部の工業諸州では労賃のはなはだしい引下げと結びついて、前月には四千人以上のヨーロッパからの入国者がヨーロッパに「逆移住」したほどであったにもかかわらず——なおひきつづき増大しつつあるのである。一八三六年のイギリスの恐慌のときは一八三七年のアメリカの恐慌がこれにつづいた。こんどは進み方が逆である。アメリカが破産の皮切りをやった。合衆国とオーストラリアとは等しくイギリスの生産物で溢れている。このことがイギリ

スの商業にとつていかに重大であるかは、グレイト・ブリテン〔およびアイルランド〕が一八五三年に商品で輸出した約一〇〇百万ポンドのうち、二五百万ポンドが合衆国に、一五百万ポンドがオーストラリアに向けられたものであった、ということから推察することができよう。東インドは、合衆国とオーストラリアにつぐもつとも重要な販売市場であった。だが東インドはすでに一八五二年にきわめて過充となつてしまつていた(war…….ubfull)ので、パンジャブおよびシンドをこえてボハラ、アフガニスタン、ベルチスタンの方へ、またそこから一方では中央アジアの方へ、他方ではペルシヤの方へ、まったくあらたに取引を拡張してゆくことによつてはじめて、輸出を八百万ポンドという旧水準に辛じて保つことができたのである。現在ではそこでもはけ口がすべてふさがっている……。東方戦争のためにしばらくの間『慎重に』商品が送られていた唯一の市場は、近東の市場であつた。だが、合衆国での恐慌とオーストラリアでの停滞(Stockung)とのために、取引はまだ過充になつていないいくつかの市場を焦りつつ探し求めることを余儀なくされており、コンスタンチノープルは買つてもらいたいあらゆる商品の堆積場所となり、そしていまではここも『メ切』と看做さざるをえない、ということとはシティでの公然の秘密である。同様にして、スペインにおける最近の運動(一八五四年のスペイン革命)は、スペインが買ひうるかぎりでのイギリスの商品を密貿易によつて「スペインへ」輸入するために利用された。この種の最近の試みは現在南アメリカの諸国にたいしてなされているが、これらの国の消費能力がわずかであることはあらためていうまでもない。——イギリスの恐慌は全世界の社会的政治的狀態にたいし決定的な重要性をもつていたので、一八五四年のイギリス商業の出来事にさらに詳しく細目にわたつて立帰ることが必要であらう」。

(1) 同じく十二月五日に終る一ヵ月間の輸出額は、一八五〇年には六〇、四〇〇、五二五ポンド、一八五一年には六三、三一

四、二七二ポンド、一八五二年には六五、三四九、七六八ポンドであった（前掲一八五三年一月十四日付「事業の繁栄」、Gesammelte Schriften, Bd. I, S. 65）。一八五三年には年間輸出額で二千万ポンド近く著増しているので、上の一八五三年に比して十一月間でも百七十万ポンドの減少というのは、大体二パーセント弱の減少であったであらうと推測される。「若干のもっとも重要な産業部門」として挙げている綿製品以下七部門について合計してみると、一八五三年四七、八六〇、五六三ポンド、一八五四年四四、五〇三、四〇六ポンドで、三、三五七、一五六ポンドつまり約七パーセントというかなり大きな減少となっている（したがって、これらの重要商品以外の諸商品の輸出のうちには、かなり増加していたものがあつたことになる）。輸出のどの程度の減少をもって、このときマルクスが「大きな恐慌がふたたび突入しつつある」という「認識はついに拒みえないものとなつた」と看做していたかを見るために、なお、後掲合衆国およびオーストラリアへの輸出統計参照。

以上が第一回の通信であるが、見られるようにマルクスは、この「商業恐慌」はある見解のいうように「戦争」に起因するものではなく、一八五三年の大きな繁栄の反動たるものであること、合衆国では「恐慌」はすでに「四ヵ月以上」つづいており、オーストラリアでもイギリスの商品が過剰となつてゐること——この両国は一八五三年の輸出のなかで四〇パーセントという大きな比重を占めていた——、そしてその他の東インドや近東の市場ももう一ぱいになつていて、滞貨のはけ口を見つけようとしてゐるがうまくゆかないでゐること、を指摘してゐる。このイギリスの「商業恐慌」はけっきよくは一般的恐慌にいたらなかつたものではあるが、このあたりは、前掲のように『資本論』第一部で「イギリスの木綿工業の運命」について「一八五三年には輸出増加。……一八五四年には繁栄、諸市場の過充」と要約されてゐるものの具体的な様相として、見ることできよう。なお『資本論』のここではこれにつづいてこう記してゐる、——「一八五五年には破産のしらせが合衆国、カナダ、東アジアの諸市場から殺到。一八五六年には大繁栄。一八五七年には恐慌」（Bd. I, S. 479）。

ついで第二回の通信——さきに「一八五四年のイギリス商業の出来事」について詳しく立帰るとしてゐたところの

——では、「一八四九年から「つまり前の恐慌後から」一八五三年までの期間におけるイギリスの商業およびイギリスの工業の増加はつぎのデータから判断されえよう」として、「商品を積んでブリテンの港に出入する船舶のトン数」が一八五三年には一八四三年のちょうど二倍にまで増加し、また「ブリテンの工業製品および原料品の輸出価額」はつぎのような増加を示したことを挙げている、——「一八四六年には五七、七八六、〇〇〇ポンドであったが、一八五〇年には七一、三六七、〇〇〇「ポンド」、そして一八五三年には九八、〇〇〇、〇〇〇「ポンド」以上、すなわち一八四二年の総輸出の二倍以上にのぼった。輸出のこの増加において、北アメリカ合衆国とオーストラリアとは、どのような役割を演じたか？ 一八四二年にはブリテンのオーストラリアへの輸出額はまた百万ポンドに達していなかった。それが一八五〇年には約三百万「ポンド」、そして一八五三年にはさらに一四、五一三、〇〇〇ポンドにのぼった。合衆国への輸出は、一八四二年には三、五八二、〇〇〇ポンドであったが、一八五〇年には約千五百万「ポンド」、そして一八五三年には二三、六五八、〇〇〇ポンドを下らなかった」と。かくしていう、「これらの数字からつぎのようなことが帰結される。第一に、一八五四年という年は、近代商業史上、一八二五年、一八三六年、一八四七年とまったく類似した転換点(Wendepunkt)をなすものであること、つぎに、合衆国での恐慌はイギリスの恐慌にとって一つのモメントにすぎないこと、最後に、一八五四年の戦争は……この社会的破局にたいしてまったくその影響も及ばさなかった、あるいは、かりに影響を及ぼしたとしてもせいぜい抑制的な、阻止的なものであったこと、である」。

つぎにマルクスはこの「最後」の点について立入った考察をしているのであるが、いまここで当時のイギリスの輸出事情——したがって生産——について若干見ておこう。右でマルクスが挙げている数字は『資本論』第三部のなか

で、一八二四年——一八六三年の「グレイト・ブリテンおよびアイルランド」——つまりユナイテッド・キングダム（連合王国）の輸出価額をしるしている数字と同じ性質のものと見受けられるが、そこでは右の前後の状況についてのつぎのように記している、——「一八三七年にそれ〔輸出額〕はふたたび四二百万〔ポンド、以下同じ〕に減少したが、あらたな最低限度はすでに元の最高限度（一八二四年の四〇、三九六、三〇〇ポンド）よりも高かったのであり、その後五〇—五三百万の間を動揺した。繁栄の立帰りによって一八四四年の輸出額は五八・五百万に増加したが、これはすでに一八三六年の最高限度（五三、三六八、五七一ポンド）をふたたびはるかに凌ぐものであった。一八四五年にはそれは六〇、一一一、〇八二ポンドに達した（一八四七年恐慌にいたる週期での最高限度）。ついで減少して一八四六年には五七百万、一八四七年には約五九百万、一八四八年には約五三百万であったが、一八四九年には六三・五百万に増加し、一八五三年には約九九百万、一八五四年には九七百万、一八五五年には九四・五百万（この数字はマルクスの書誤りである。くわしくは九五、六八八、〇八五ポンド）、一八五六年には約一一六百万、そして一八五七年には一二二百万という最高限度に達した。一八五八年には一一六百万に減少したが、すでに一八五九年には一三〇百万に増加し……」²⁾（Bd. III, S. 546, 長谷部訳、青木版七〇九—一〇ページ）。見られるように、一八四七年恐慌ののち、一八四九年にはすでに前の週期の最高限度をこえており、一八五三年に一つのピーク、そしてその後二年ほどすこし落ち——いま見ている「商業恐慌」はこのときに書かれているわけである——、一八五六、五七年には五三年のピークをこえている。この一八四七年恐慌後の数字をもうすこしくわしく示すとつぎのようであった。³⁾（Hans Rosenberg: Die Weltwirtschaftskrisis von 1857—1859, 1934, S. 83, なおH・ローエンベルクはこの数字の出所を Economist, London 1859, Bd. 17, Nr. 803 (Ergänzungsheft) と記している）。

年	輸出価額 (単位百万ポンド)
1848	52.8
1849	63.6
1850	71.4
1851	74.4
1852	78.1
1853	98.9
1854	97.2
1855	95.7
1856	115.8
1857	122.1

年	U. S. Aへ	オーストラリア へ (単位ポンド)
1848	9,564,909	1,463,837
1849	11,971,028	2,080,469
1850	14,891,961	2,602,253
1851	14,362,976	2,807,356
1852	16,567,737	4,222,205
1853	23,658,427	14,513,700
1854	21,410,369	11,931,352
1855	17,318,086	6,278,966
1856	21,918,105	6,912,575
1857	19,182,931	11,626,146

また、このイギリスの輸出額のうち、アメリカ合衆国およびオーストラリアへの額は上のものであった。(a. a. O. S. 82)。

カリフォルニアおよびオーストラリアでの金鉱の発見がイギリスの経済に与えたきわめて大きな影響を端的にここに見ることができる。そしてしたがって、上昇が急激であつただけに一八五四年における変化は当時かなりの深刻さをもつたであろうことを窺うことができる。「連合王国の外国貿易は、合衆国およびオーストラリアに一八五四年にやつてきた停滞によつてしばらく難儀をかけられた」(H. Rosenberg: a. a. O. S. 83)。しかしなお、イギリスのこの事態は、一般的恐慌にはいたらなかったのである。リヤザノフはこの論文「商業恐慌」について *Gesammelte Schriften* 第二巻末の「解説と註釈」のところで、こうした点についてつぎのように述べている。——いま見たことのくり返しにもなるが、右の数字の解説として見られたい。「マルクスはこのたびも誤った。これはたんに一つの部分的恐慌 (eine partielle Krise) であつて、けつして一般的恐慌ではなかつたし、また、かれの期待に反して一八五四年は近代商業史上の転換点をなすことにはならなかつた。疑いもなく、産業は、とくにランカシャーにおいては、きわめて悪い状態にあつた。タイムズはじめは恐慌を否定していたが、事実を認めることを余儀なくされた。『戦争での危機と商業恐慌と

が時を同じくしてやってきた。……』——マルクスの期待を強めさせたものは、合衆国ではすでに秋（一八五四年）に恐慌が勃発していたという事情であった。だがかの地にあっても、それは地方的な、一時的な攪乱（Störung）であった。イギリスでは攪乱は主として木綿工業をとらえた。この攪乱は部分的には、ロシアへの輸出が急に止ったことから説明されうるものであったが、しかしはるかに大きくはオーストラリアでの逆転であった。金鉱の発見以来、イギリスからオーストラリアへの輸出は異常に急激に増大した。すでに一八五二年にはその輸出は四、二二二、二〇五ポンドに達したが、翌年にはその三倍以上になった。人口数やその需要をすこしも顧慮することなしに、イギリスの輸出業者はオーストラリア市場を完全に商品で溢れさせた。こうした過度投機はなお一八五四年の前半の間つづいた。秋にオーストラリアにおいて恐慌が勃発した。合衆国からヨーロッパへ何千人もの入国者が『逆移住』したのと同様に、オーストラリアからイギリスへ商品が送り返された。一八五五年にはオーストラリアへの輸出は一四、五一三、〇〇〇ポンドのかわりにたんに六、二七八、九〇〇ポンドにしかならなかった。減退はきわめて大きかったので、それは他の国々への輸出増加によっても償われえなかった。かくして一八五四年の輸出は九七、一八四、八〇〇ポンドと、一八五三年よりもわずかばかり（八〇〇、〇〇〇ポンドほど）この引算は前掲の表と一致しない。リヤザノフの書誤りであろう）下廻った。しかしそれにもかかわらず、一八五二年と比較すると好景気の年であった（だがその間の生産規模の拡大を考慮せねばならない）。繊維工業の若干の部門は軍隊向けの生産の増加によって埋合せを見出した。そのうえ、戦争は、マルクスも認めているように「これはあとで見る」、一連のその他の工業部門を促進した。……一八五五年の輸出はまたも九五、六八八、〇八五とわずかに減少を示したが、しかしとはいえ一八五二年——そこでは七八、〇七六、八五四にすぎなかった——にたいしては大きく上廻っていた。やっと締和締結後の一八五六年になって一八五三年

——つまり、マルクスがいま満期到来の恐慌を期待しつつイギリスの最高の繁栄の年としるしている〔これも後掲〕年——の輸出は大きく乗りこえられた(一一五、八二六、九四八ポンド⁴⁾) (Gesammelte Schriften, Bd. II, S. 500—1)

(2) ここでいっている「最高限度」「最低限度」については、その前でマルクスはつぎのように述べている、——「現実資本、すなわち生産資本および商品資本の蓄積にたいしては、輸出入統計が一つの基準を与える。そして輸出入統計を見ればつねに つぎのことが示されている、——十年ごとの循環をなして運動するイギリス産業の発展期(一八一五—一八七〇年)には、いつでも、恐慌以前の最近の繁栄期の最高限度が、つぎに生じる繁栄期の最低限度として再現して、それから、さらにずつと高いあらたな最高限度に増大する」。この記述およびそのあとでのエンゲルスの補足的書入れについては筆者稿「一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解」(二)、本誌第十卷第三号、一〇一—二二ページ参照。

マルクスは一八五九年九月五日付の論文「製造業と商業 (Manufactures and Commerce. — Rubel : Bibliographie, p. 150)」(『トリビュン』一八五九年九月二十三日号所載)の前半において、一八四四年から五八年にいたる輸出統計および一八五四年から五八年にいたる輸入統計を掲げ、これを分析しつつ、後年『資本論』で右のように示されていると同様な見解をつぎのように述べている(大月選集訳、第九巻、一九八一—二〇一ページ)。すなわち、「過剰生産と極度の投機との結果として恐慌が起つたとしても、一国の生産力と世界市場の吸収力とは恐慌に先立つ時期に非常に拡大されているので、これらは最高到達点からただ一時後退するだけであり、わずか数年の間のいくらかの動揺のちには、商業循環の一期間における繁栄の最高点を示した生産の目盛りが、つぎの期間の出発点となる」とし、そこではこれを「数字的な正確さで証明しようところの生産の法則」と呼んでいる(傍点—三宅)。

なお、マルクスは右論文のなかで輸出、輸入の両表を比較し、「不均衡〔輸出と輸入との間の。ここでは輸入超過〕が輸出の増加と同じように規則正しく増大している」ことを挙げ(ただし、マルクスがここに掲げている輸出統計は国内生産物だけについてのものであり、「植民地および外国生産物」の輸出を含んでいないから、両表の比較から「不均衡」の大きさをただちに引き出すことはできないであろう。マルクスの掲げている表では貿易尻のマイナスは約五—六千万ポンドほどに達するが、H・ローゼンベルクの上掲書所載の総輸出の数字で比較すると、貿易尻のマイナスは三—四千万ポンドとなる)、このことは「イギリスが世界市場にたいして工場主および商人という機能よりも債権者という機能をより一層急速に発展させていること

を証明している」ものであると論じている。当時すでにイギリスは大きく貿易外収支によって貿易尻のマイナスをカヴァーしていたのである。とはいえ、輸出が減退すれば輸出業者や輸出産業にとって困難が生じることには変りはないが。

(3) これは「国内生産物」の輸出額であつて、「植民地および外国生産物」の輸出額を含んでいない。なおH・ローゼンベルクはここで輸出入について「現実価値 (wirklicher Wert)」での統計——上掲の数字がそれである——と並べて、「公的価値 (offizieller Wert)」での統計を掲げ、「公的価値」のは「一六九六年につくられた価格表による」——したがって量的変化を知りうる——のにたいし、「現実価値」の方は「年平均価格」による評価であつて、「イギリスの貿易統計において」——と記しているが、しかし国内生産物の輸出についてはそれ以前から「現実価値」での算定が行われていた——一八五四年に採用されたと記している (S. 83)。周知のように、価値を見る貿易統計のつくり方にはこのように年平均価格を出して評価する方法と申告制によるものがあるが——後年のイギリスでは申告制——、マルクスはさきの輸出入統計の数字を掲げているところで、「繁栄の年たる一八二四年におけるグレイト・ブリテンおよびアイルランドの輸出生産物の現実価値または申告価値 (der wirkliche oder deklarierte Wert) は」云々と記している (Bd. III, S. 546)。これはどう解すべきであるか、一つの疑問として備忘的に註記しておく。

(4) ついでリヤザノフはつぎのように記している。——「かくて、ふたたび大きなイギリスの恐慌が、しかも一八四七年や一八三六年よりもっと有害な広がりにおいて、突入してきている、というマルクスの一八五五年一月の『予言』は立証されなかつた。それは、一八五三年の秋におけるように、また一八五四年十月および十一月におけるように、二つの貨幣逼迫 (Geld-klemme) であつたのであり、〔前掲——本誌前号八五—六ページ——W・ニューマーチの証言参照〕、これは一月末〔一八五五年〕にいちじるしく激化した〔リヤザノフはなにを根拠として「激化した」といっているのか明らかなでないが、事実「イングランド銀行発券部の地金保有高 (Bullion in the Issue Department)」——したがって、イングランド銀行の金保有高総額とはすこしずれがあることになる——は一月四日の一三、一八〇、八三五ポンドから二十日には一一、八八〇、五六〇ポンドに下り、このように一千二百万を割つたのはこの一八五五年秋の強い逼迫のさいにふたたび現われたことであつた (H. D. Macleod: The Theory and Practice of Banking, 2nd ed. vol. II, p. 148 の表による)。しかしバンク・レートはこの一月には五パーセントのままで、それ以上には引上げられなかつた。』シティでは——マルクスは一八五五年一月十九日

付エンゲルス宛の手紙のなかで書いている——『パニックがひどく (kolossal)。そして、昨日フライリヒラートが書いてきたところでは、春のはじめまでには、もっとも多血質の人々 (Sanguinischen. Briefwechsel のインスティットゥート版では „Sanguinisten“) の間でさえも、今度は非常に悪くなることが予想されている』。しかしパニックは通りすぎ、一八五五年秋に改めてふたたび生じた。マルクスはかれの誤りを認めた、——後年かれは、あらゆる一般的な生産および商業恐慌の特殊の局面としての貨幣恐慌を、独立的に生じうるところの、かくして産業および商業にはただ反動的にのみ作用するところの貨幣恐慌から正確に区別している(これは『資本論』Bd. I, S. 143, Fußnote 99を指しているであろう。そしてリヤザノフは一八五五年の——この一月の、あるいは同年秋季の——事態をこの「独立的に生じうる貨幣恐慌」と規定しうるものと考えてこう述べていると見受けられるが、一八五五年の事態を果してこう規定しうるかどうかは問題であろうと思われる)。……またもかれの友人たちは、失敗した『予言』を笑い草にした。長い間待ち望んでいた恐慌がついに勃発したとき、マルクスは一八五七年十二月八日にエンゲルスに宛てつぎのように書いている。——『ループス(ウィルヘルム・ヴォルフ)はたえずわれわれの恐慌予告を帳付けしていたから、かれにこういつてくれたまえ、前週土曜日のエコノミストは、一八五三年の最後の月、一八五四年の間中ずっと、一八五五年の秋、および一八五六年の突然の変化のさい、ヨーロッパはつねに紙一重の差で迫りつつある崩壊(Krach)から助かってきた、と明言している』(「既掲のように一八五七年の「銀行条例委員会」でのW・ニエーマーチの証言においても、くり返した貨幣逼迫が生じたこと、そして貴金属の到着によつてこれが取除かれてきたことを述べている(本誌前号八五—六ページ)。またマルクスは一八五七年十一月三十日号『トリビュン』掲載の論文のなかでも、バンク・レートの動きを跡づけつつ、「恐慌はすでに一八五五年十月に到来しなければならぬところであった」と述べている(「一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解」、本誌第十巻第二号、一五—一六ページ参照)。このように、このたびも「予言」は当然なかつたとはいえ、マルクスは、より以前の時期とはちがつて一八五五年のあたりには、諸事情の恐慌への成熟度はもうすでに十分になってきていたのだ、と「予言」が当然なかつたのち一八五七年の恐慌を見たあとにおいても考えていたわけである」(a. a. O. S. 501)。

マルクスはついで、戦争は恐慌促進にたいして影響を及ぼしていないというさきの「最後」の点についてつぎのように述べている。「個々の産業部門、たとえば、革、鉄、羊毛製品の製造業は、造船業と同じように、直接に戦争の

需要によって支えられていた。四十年間の平和な年月「一八一五年ナポレオン戦争終了」のちに宣戦布告によって呼び起されたところの恐怖のために、投機の翼がしばらくの間痲痺させられた。戦争によって惹起されたヨーロッパ諸国の借入金のために、利子率は、産業的企業の倒壊を妨げかくして恐慌を抑えるような高さに維持された「低い利子率、貸付可能な貨幣資本の豊富は、企業の拡張、投機を助長し、かくして企業の倒壊をもたらすことを促進する、という考えからこういつているわけである。外債がロンドンで募集されたほか、イギリスの国庫自身も借入を採った。「五十年ぶりに政府は戦争のために借入をしていて、長期の利子率は高くなっていた。かくてバンク・レートは「戦争の間」、一八五五年五月「四月」―九月の間を除いては——このときにはそれは四パーセントまた三 $\frac{1}{2}$ パーセントにさえた——、五パーセントまたはそれ以上といふかなりの高さを保合った「このバンク・レートの高位は、穀物輸入やその他の国外での戦争のために、金が出ていったためでもあったのである」(J. Clapham: The Bank of England, vol. I, p. 222)。なお、しかもこの程度に納っていたのは、「南からの着実な金流入およびより断続的であった西からの流入なくしては不可能であったであろう」(P. 222)と」。しかるに平和協会(Peace Society)「マンチェスター派のコブデン、ブライトの組織していたもの」はいう、戦争が穀物価格を騰貴させたのではないか？ 穀物価格の騰貴は国内取引(domestic trade)の、すなわち工業製品のイギリスにおける消費の減少と同じ意味ではないか？ そして国内市場のこのような縮小が恐慌の主たる要素(Hauptelement)ではないか。と。

——まず、イギリスの最高の繁栄の年たる一八五三年は穀物価格の高い年であったこと、そして一八五四年の穀物価格は平均して一八五三年のそれ以下に位しており、したがって穀物価格の見地からでは、一八五三年の繁栄も一八五四年の恐慌の徴候も説明されえないこと、を指摘しなければならない」(傍点―マルクス)。ついでマルクスは、「だが、工業にたいする穀物価格の影響は措くこととして、穀物価格にたいする戦争の影響はどうであったか？ いいかえれ

ば、穀物価格はロシアからの輸入が減退したために騰貴したのであるか？」として、「平和協会」の説くさきの主張のいま一つの方を探り上げてつぎのようにいう。ロシアから小麦の輸入はグレイト・ブリテンの「国民消費の約二・五パーセント」を供給しているにすぎず、しかも一八五三年のロシアからの輸入は最近の官庁報告によると七七三、五〇七クォーター、戦争の年の一八五四年は五〇五、〇〇〇であったのであり「ロシア産の工業原料と同様に小麦も、中立のプロイセンを迂回して輸入されていたのであろうか」「この減退（しかもこれはその他の国々からの小麦粉の輸入増大によつて補われていた）が、一八五四年の特別よかった（ausgezeichnet）収穫の価格を、ほぼ、一八五二年および一八五三年の凶作の（schlecht）年の高さにまではね上げた、とはだれも主張しようとはしないであろう。それどころではない。ロシアの穀物がすべて、来なかつたとしても、かかる作用は生じなかつたであらう」（傍点―マルクス）。

ここでマルクスが、穀物価格の騰貴から国内市場の縮小を、そしてこれを恐慌の「主たる要素」として説こうとする見解に反対していることは、当時の事情がどうであつたかは別として、注意をひくことといえよう。⁵⁾ところで右の反論中、一八五四年の穀物価格は平均して一八五三年のそれ「以下」であつたとマルクスが記している点について、リヤザノフはつぎのように述べている。「たしかにコブデンやブライイトはロシアからの穀物輸入の影響を過大評価しすぎていたが、しかしつぎの事実はたしかである。すなわち、一八五三年に凶作のためにいちじるしく騰貴して、一八五二年の四〇シリング九ペンスから五三シリング九ペンスとなつた小麦の平均価格は、一八五四年には七二シリング五ペンスまた一八五五年には七四シリング八ペンスにはね上り、したがつて飢饉の年であつた一八四七年の平均価格よりはるかに高かつた（一八四七年の穀物価格は、五月には小麦一クォーター一二四シリングにまで上つたが、八月なかば以来豊作予想から崩れ、九月には四七½シリングにまで下つたのであつて（筆者著『貨幣信用論研究』、二三九ページ）、この年の

年平均はあまり意味をなさないと思われる」。このあと「マルクスがこの論文を書いたあと」一ヵ月も経ないで、「一八五五年」二月に、穀物暴動が勃発した」^{6c}と (Gesammelte Schriften, Bd. II S. 501—2)

(5) さきに見たように『トリビュン』掲載の一八五三年一月二十八日付の通信のなかで、マルクスは、農業事情がはなはだ悪いとし、「したがって、カリフォルニアおよびオーストラリアで市場ならびに鉱山が開発されたためにやや遅らせられていた恐慌は、凶作となれば、疑いなくはじまるであろう」と書いていた(本誌前号、七二ページ)。これは、この通信の翌日付のエンゲルス宛手紙のなかで「主要商品や食料品がかなり豊富かつ低廉であった間は、オーストラリアその他と相まって事態はなお長びくことができた」(同じく前掲)といっているところから見ても、穀物価格の騰貴↓国内市場の縮小を恐慌を促進する一つの大きな契機と考えてこういつていたものと見受けられる。上の「平和協会」の見解にたいする反対は、これをもって恐慌の「主たる要素」と見ることに反対しているのであろう。なお、右で「……恐慌は、凶作となれば、疑いなくはじまるであろう」といつているに当っては、凶作によって穀物輸入の増大、金流出、バンク・レートの引上げといった一連の事態が生じ、この金融市場の逼迫が、醸成されつつある恐慌を勃発にまでもたらすであろう、といったこともまた念頭におかれていたのであろうと思われる。

(6) ついでリヤザノフはこう述べている、——「ともかく、穀物価格のこの騰貴をロシアからの輸入の減退だけから説明することはできないのであって、この輸入減退は合衆国からの輸入増大によつて一八五四年には大部分相殺された。それ〔穀物価格の騰貴〕は戦争の結果であつたのであり、戦争のため地主や借地農業者は好景気を大いに利用することをあえてなしたのであつた〔これによると、リヤザノフはこういう点からは結局、「戦争が穀物価格を騰貴させた」という主張を認めているわけである〕。高価格を正當づけるために、かれら〔地主や借地農業者〕は断乎として、収穫が——タイムズその他の諸紙が主張しているように——特別よかつたことを、否定した〔「平和協会」——マンチェスター派——はそうするところの場合「地主や借地農業者」の側に立っていたことになる?〕。当時、収穫高 (Ernteertrag) の統計が、なんら存しなかつたので、かれらはそれだけより容易にこう否定することができたのであつた」(a. a. O. S. 502, 傍点—三宅)。

(7) Chatham: The Bank of England によつて、「一八五三年後期から一八五六年の高収穫を見るまでの間、小麦はしばしば八〇シリングを上廻り、七〇シリング以下になつたことはまれであつた」と (Vol. I, p. 222)。なお同書によると、クリミア

戦争の二年間イギリスの収穫は「不作（poor）」であり、一八五五年の収穫はとくに悪かった、としている（pp. 222—3）。こうした不作のため穀物輸入が大きく、それが当時のバンク・レートが前記のようにひきつづき高位であったことの一因であったと見られているわけである。

つぎに第三回の通信のなかでは、「ロンドン・エコノミストは現下の商業および産業恐慌〔商工業恐慌〕（gegenwärtige Handels- und Industriekrise）にかんしてつぎのように述べている」として、同誌（発行人ウィルソン）がイギリスの機械輸出について、「フランス、ドイツ、ベルギー、オランダ、スイス、および合衆国はいまではすべて大製造業国であり、そのうちのいくつかの国はわれわれを凌ぐ利点をもっている。われわれは競走して走らねばならないのであって、われわれが自分の足を固く縛りつけておくならこれに勝つことはできない。……しだいに工場労働者も、かれらの利益のために存在している法律的諸制限〔十八歳以下の若年者、婦人、および十二歳以下の子供にたいする労働時間の法律的制限〕がかれらに害を与えるにすぎないことを悟るであろう。しかしながら、上記の国々が進歩をとげて、自国および第三国の市場からイギリスをしめ出し、もってわが国の工場労働者たちを極度の窮乏におとし入れうるようにならない前に、工場労働者たちが上のことを悟ることこそ望ましい」と説いているのを引き、こうした「マンチェスター派」の「御説教（Homilie）」にたいしてつぎのような皮肉な評を記している。「二つのあたらしい黄金の市場——オーストラリアおよびカリフォルニア——の突然の出現にもかかわらず、また電信機が全ヨーロッパを一つの大取引所に転じたにもかかわらず、また鉄道と汽船が交通したがって交換を信じられないほど増大させたにもかかわらず、世界市場が過充になってしまっているとすれば、——もし工場主たちが十一時間のかわりに十八時間働せることが自由に認められていたならば、恐慌の人を待たすことはいくばくであったであろうか？ この算術例はあま

りかんたんであつて、解答の必要もない」と。

つぎに第四回の通信ではつぎのように述べている。——「大蔵大臣ロビンソンが一八二五年の議會を商工業の未曾有の昂揚にたいする熱狂的頌歌で開会したことは、周知のとおりである。その数週間後には、イングランド銀行はその現金払をまさに停止せんとしていた⁸⁾ (war... auf den Punkt, ihre Barzahlungen einzustellen)」。そのとき以来ロビンソンは、コベットによつてかれにつけられた『景氣屋ロビンソン (Prosperity = Robinson)』という綽名をえた。イギリスでは歴史的先例が好まれるから、景氣屋ロビンソンも追隨者なしにはすまされなかった。最近の臨時議會開院式のさいの勅語は、農業、製造業、商業の異常な隆盛状態について国土を祝福した。しかし、ロビンソンの目をいささか迷わすことができた外観さえもすでに消え去つていたのである。……新聞は、共謀して沈黙を守ることによつて、……商業恐慌を「葬る」ことができるとでも信じているのであろうか？ だがしかし、価格表が語り、官報での破産リストが語り、『取引先』の通信が語る。やがて新聞も語るであろう。前週きわめて大きな支払停止がシテイで生じた。そのうちでもっとも主立ったものは、スペインおよび西インド貿易に従事している Loneragan 商会のそれ、マンチェスターおよびその周辺の工場地帯と取引していた Rogers Lowrey 商会のそれ、アメリカ貿易をやつていた Kotherington 商会のそれ、最後に、古くて信用のある商会である Aubertius 兄弟のそれであつた。これらのいろいろな商会の債務は、平均して十萬から十五萬ポンドの額とのことである。今週には、すくなくとも七軒の、シテイの主立った商会のあらたな支払停止が予想されている。——一月二十日付のバーミンガムからの一商業通信から、南スタフォードシャー地方の工業の状態についてのつぎのような詳細を引用しよう、『政府の註文で軍需品を生産している鉄工業の会社を除き、なんらかの註文をもっているものはほとんどなく、また註文をもっているものも、その

価格の極度に引下げられている。夏のなかごろには一二ポンドの相場であつた棒鉄一トンが、現在では八ポンド一〇シリリングで買えるが、こうした安い価格でさえほとんど売れ口がなく、したがって生産を制限しなければならない。北アメリカ合衆国の大会社のうち、かの地の商業恐慌によつて鉄事業ほど被害を受けたものはあまりない。莫大な額が費出されている合衆国のほとんどすべての大きな鉄工場がその労働者を解雇した、しかも近々に復職させる見込みはない。したがって、アメリカの鉄消費はほとんどまったくまったものと看做されねばならず、われわれはかの地からいま以上の注文を期待することはできない。……金融市場の状態は、あらゆる取引部門にたいして攪亂的に作用することをつづけている。諸銀行はきわめて不利となる方法でしめあげており、現在うまくいっている事業はただ一つ、貨幣貸付業者のそれだけである。ちいさい公設質屋には借入希望者が殺到しており、また手形割引業者はいい儲けをしてゐる』。

(8) 「イングランド銀行の」理事たちは、支払停止をせねばならぬことがたしかだと考えたので、制限条例(Restriction Act)について政府の意向を打診したが、政府は絶対的にそれを断わり、イングランド銀行はその最後のソヴリン金貨まで払出すべきと決めた」(Macleod: op. cit. vol. II, p. 96)。このパニックは、「外国為替相場がはつきりとイギリスに順に転じたので、〔十二月〕十四日の水曜日にイングランド銀行はその政策をすっかり変えた〔それまでは一流手形の割引、一流の担保への貸付もとめていたが、これを積極的に貸出す政策に変えた〕」ことや、しまつてあつた「ポンド券の箱に気付きこれを出して銀行券の需要に応じたことや、またフランスから金が来たこと、などによつておこまつた。なお、§ Clapham; op. cit. vol. II, pp. 100-1.

以上一八五五年一月八日—二十三日付の一連の通信「商業恐慌」について見てきたが、同年三月二日付の通信「イギリスの憲法 (Die britische Konstitution)」(「N. O. Z.」一八五五年三月六日号所載) のなかでもつぎのように「商工業恐慌」について、イギリスにおいてそれが進行中であることを述べている。「この一般的絶望 (政治的危機のこと) のさなかにおいて、戦争が行われねばならぬばかりでなく、皇帝ニコライよりさえも危険な敵と闘わねばならないのである。この敵というのは、商業および産業恐慌 (商工業恐慌) であって、これは昨年の九月以来日ごとに強力性および普遍性をましてきている。穀物法の廃止以来供給過剰の市場および社会的な危機は永久に過去の幽明界に追放された、と年来御説法してきた皮相な自由貿易の使徒たちの口をこの恐慌の鉄の手はただちにふさいでしまった。市場が供給過剰となるや、わずか五ヵ月前にはいくら生産しても生産しすぎることはないと独断的確信をもって教えていたこの同じ経済学者たちが、だれにもまして、工場主が生産を制限する用心を欠いていたことを声を大にして非難しているのである。病氣は慢性的な形態をとつてすでにプレストンの労働罷業 (一八五三年。本稿内で見たように、同年秋頃からは、工場主側は生産過剰対策という意味も含んで工場閉鎖を採った) のときに現われていた。そのまもなくのち、アメリカ市場の供給過剰 (Ueberfuhr) によって恐慌が合衆国で勃発した。インドとシナとは、カリフォルニアやオーストラリアと同じように供給過剰になっていたとはいえ、いぜんとして過剰生産のはけ口となっていた。イギリスの工場主は、これらの商品をその価格を下げないではもはや国内市場では販売することができなかったので、みずからその商品を委託販売の形で (auf Konsignation. 「本稿註(2) 参照」) 外国へ、とくにインド、シナ、オーストラリアおよびカリフォルニアへ送るといふ、危険な手段に逃げ口をとった。こうした回避手段は、商品が一時に市場に投げ出されたときよりも、しばらくは取引の攪乱をよりわずかにとどめることができる。しかし商品がその送先地に到着す

るやいなや、ただちにその他の相場を決定し、そして九月末ごろにはその影響はここイギリスにおいても感じられるようになった。恐慌はついで、その慢性的性格を急性的性格に変じた (vertauschte ihren chronischen mit einem akuten Charakter)。崩壊した最初の商会は更紗捺染業者で、そのなかにはマンチェスターおよびその附近の古い商会もあった。順番は、つぎには船舶所有者ならびにオーストラリアおよびカリフォルニア商人、ついでシナ商社、最後にインド商社にやってきた。すべてのものに順番がやってきて、大ていのものはひどく損害を蒙り、その業務を停止しなければならなかったものも多く、そしてこれらの取引部門のうちどれ一つとして危険がすぎ去っているものはない。反対に、危険はたえず増大している。絹製造業者も同様に襲われ、その産業は、目下ほとんど壊滅に瀕しており、それが営まれている地方は非常な窮乏に見舞われている。順番はいま木綿紡績業者と織物業者のところにきている。それらのうちの若干がすでに倒れているが、大部分のものが同じ運命を辿らざるをえないであろう。われわれは以前に、細糸紡績業者 (Feingarnspinner) はほんの短時間しか操業していないことを見たが、粗糸紡績業者もまもなく同じ手段に逃げ口をとることであろう。これらの一部は現在すでに週のうち二、三日しか操業していない。かれらはいつまでこの状態をもちつづけるであろうか？ もう二、三ヵ月すれば、恐慌は工業地域において一八四二年の高き (一八四二年は後年エンゲルスが「後産的恐慌」 (Bd. III, S. 600) と呼んでいたものである。既掲のように一八五〇年代のはじめマルクスは前の循環を「一八四三—四七年」と考えていた) に達するであろう——たとえそれ以上にならないときでも。しかしその影響が労働者階級の間一般に感ぜられるようになるやいなや、六年間多かれ少かれこれら階級の間で眠っていた、そしてあたらしいアジテーションのための幹部だけを残していたにすぎなかった政治運動が、ふたたびはじまるであろう」 (Gesammelte Schriften, Bd. II, S. 167—8, 改造社全集訳、第七卷、一〇四—五ページ、大月選

(9) これは一八五五年二月十六日付の通信「ハーバートの再選。―新内閣の第一歩。―東インドからの報道 (Nachrichten aus Ostindien)」のなかでつぎのように報じていたのを指しているものであろう。「最近の東インドからの報道は重要である、というのは、これはカルカタおよびボンベイでの事業が絶望的だと述べているからである。製造業地方で恐慌はゆつくりとしかし確実に、進行している。マンチェスターの精紡績工場 (Feinspinnereien) の所有者は、一昨日開かれた集会において、二月二十六日からこれらの工場を週に四日だけ働かせること、またその間に附近の工場主たちに同じような措置を採るよう勧告することを決議した。ブラックバーン、プレストン、およびボルトンの工場では、労働者にたいして、こんご『短時間』しか作業しないことがすでに告示された。――破産は、昨年多くの工場主たちが市場を無理に手に入れるために仲買商社を無視して輸取出引を自分の手に引受けたので、より一そう数多くかつ大きくなるであらう。前週水曜日のマンチェスター・ガーデンは、製品についてばかりでなく、工場についても過剰生産が存している、と告白している」(Gesammelte Schriften, Bd. I, S. 147, 改造社会集訳、第七卷、八五ページ)。

マルクスはこのように、一八五五年一月の論文「商業恐慌」につづいて、三月にいたっても、「商工業恐慌」は「昨年の九月以来日ごとに強力性および普遍性をましてきている」と観測していた。リヤザノフは前掲のように、一八五五年一月の事態を「それは一つの貨幣逼迫であったのである」と記しているが、いま金融情勢について見ると、前記のように一八五五年一月に約一千二百万ポンドを割った「イングランド銀行発券部の地金保有高」は、その後二月、三月と月を追って増加を辿り、四月には一千四百万台となって同月五日にはバンク・レートは五パーセントから四 $\frac{1}{2}$ パーセントに下り、五月には一千五百万台となって同月三日バンク・レートはさらに四パーセントに下り、六月にはさらに一千七百万ポンドをこえて同月十四日バンク・レートは三 $\frac{1}{2}$ パーセントと引下げられた (MacLeod: op. cit. vol. I, p. 148, Clapham: op. cit. vol. I, p. 429)。以後六月末から金流出がはじまりバンク・レートはふたたび引上げら

れていったのであるが、それは、あとでまた見ることにして、一八五五年一月以後逼迫はゆるんできて、二月―六月は、すくなくとも金融情勢にかんしては、金融緩慢―低金利が現出した。そして、前記のように、二年間のクリミア戦争の間バンク・レートが五パーセント以下に下ったのは、まさにこの一八五五年四月―九月の間だけであった。永久の繁栄を説いていた自由貿易論者たちが市場の供給過剰に慌てていることを揶揄し、恐慌がその強さ、その広がりにおいて日ごとに増大してきていると述べてきたマルクスたるもの、ここでこの情勢にたいしてなんとか説明しなくてはならないことになる。一八五五年五月十九日付の「金融事情(Finanzielles)」(「N・O・Z」一八五五年五月二十二日号所載)は、こうした時期的背景のもとに書かれたものであった。つぎにこれを全文見てみよう(Gesammelte Schriften, Bd. II, S. 246—8, 改造社全集訳、第七巻、一九五―七ページ、大月選集訳、第六巻、三八九―九二ページ、なお、この原文は Marx/Engels, Kleine ökonomische Schriften, 1955, Bücherei des Marxismus-Leninismus, S. 562—4, にも収録されている)。

「当地の新聞の楽観論者たちによると、イギリスの事業恐慌(Geschäftskrisis)は終結に達し、商工業はふたたび上昇線を辿っているという。かれらがこうした慰安的な結論を引出している事実というのは、金融市場の引緩み(Erläuterung)である。すなわち、一方ではイングランド銀行の金庫内の金保有高が増加し、他方では同行が利子歩合を引下げた。金保有高は一八五五年一月二十日にはわずかに一二、一六二、〇〇〇ポンドにすぎなかったが、「この数字が前掲註(4)での数字とずれがあるのは、そこで附記しておいたように、前掲の数字は「発券部」の保有高であるが、イングランド銀行の金保有高というさいはこのほか「銀行部」の保有高が入るからである」、一八五五年五月十二日には一六、〇四五、〇〇〇ポンドに上昇した、——三、八八三、〇〇〇ポンドの増加である。利子歩合は一八五五年一月二十日には五バ

一セントであったが、同行はこれを三月三十一日には四¹/₂パーセントに、また四月二十八日には四パーセントに引下げた。「この日付はさきに記しておいたクムバムの書での記録といずれも五日のずれがある」。だがこれらの諸君は、「イングランド」銀行の金庫内での金の累積と利子歩合の低落は事業の繁栄以外の原因から生じうることを、すなわちその逆の、事業の停滞およびそれと結びついている資本にたいする需要の減退という原因をもちうることを、見逃がしている。このたびはこの後者が真の (wirklich) 原因であることは、イングランド銀行から毎週発表されている表が示している。上の樂觀論者たちのように、もっぱらこの表の二つの欄——金保有高と利子歩合——の上にしか眼を向けないのではいけないのであって、このほかの欄——準備銀行券の欄と割引手形の欄——も比較しなければならぬ」(傍点—マルクス)。

マルクスはこういって、この「準備銀行券」と「割引手形」の項を併せ見ることによって「事業の停滞」「資本にたいする需要の減退」を論証しようとするのであるが、それに先立って一般読者に予備知識を与えるために、つぎのようにイングランド銀行の仕組みについて——したがって「準備銀行券」とはなにかについて——説明している。

「周知のようにイングランド銀行は二つのちがった部、すなわち発券部 (Issuing department) と銀行部 (Banking department) に分かれている。前者をわれわれはイングランド銀行の造幣局 (Münze) と呼ぶことができる。その全業務は銀行券を製造することである。一八四四年のロバート・ピールの条例によって、この銀行券製造は法律的に制限されている。すなわち「イングランド」銀行は、国家が同行に債務を負っている資本額であるところの千四百万ポンド以上については、その金庫のなかの金保有高をこえて銀行券を発行することはできない。したがってたとえば、「イングランド」銀行が二千万ポンドの銀行券を発行するならば、六百万ポンドにたいしては金がその地下室に

なければならぬ。同行発券部の業務は、このように規制されている銀行券の造幣と発行とに限定されている。発券部によってこのようにして製造された銀行券はすべて銀行部に引渡される。銀行部は本来の銀行であつて、預金や割引を扱う他のすべての銀行と同様に公衆と取引をし、また、銀行券を——手形の割引、利子生み証券にたいする前貸、国債所有者にたいする国債利子の支払、同行に預けられた預金の払出、等々を通じて——流通場裡に出す。ロバート・ピールが、イングランド銀行を互いに独立した二つの部に分け、発行される銀行券総額を右のように規制する、というこうした立派な発明をしたわけは、この方法でこんどのすべての貨幣恐慌を予防し、また自動的機械的な法則によつて紙券の流通を調整しようと空想したからであつた。名声の高いこの政治家が見落したことは、かなり重要なつぎのような事実——かれの規制は発券部と銀行部との間、つまりイングランド銀行の二つの部の間の流通を調節するだけで、けつして銀行部と外界との間の流通を調節するものではないという事実——であつた。「イングランド」銀行の発券部は、法律上製造しうるだけの額の銀行券を、たとえばその金庫に六百万「ポンド」の金があるときには二千万「ポンド」を、銀行部に引渡す。しかしながら、これら二千万「ポンド」のうちどれだけがいま現実に流通に入るかということは、事業の状態に、商業界の欲求と需要とに依存している。「イングランド」銀行が流通させることのできない、したがつて銀行部の金庫のなかに横たわつたままである残額は、同行の計算書では準備銀行券の名目に出てくる」。

このように予備的説明をしたのち、はじめの問題に立ちかへつて、つぎのように論じている。「さて、「イングランド」銀行の金保有高が一八五五年一月二十日から一八五五年五月十二日までに三、八八三、〇〇〇ポンド増加したことをさきに見たが、この同じ期間に、準備銀行券の額は五、四六三、〇〇〇「ポンド」から九、四一七、〇五〇「？」

○「ポンド」に、すなわち三、九五四、〇〇〇ポンドだけ、増大していることに気がつく。準備銀行券、つまり銀行部の金庫のなかに横たわったままでいる銀行券の額が大であればあるほど、現実に公衆の間で「諸銀行の金庫のなかで現金準備となっているものを含む」流通している銀行券の額はそれだけ小さい「これはもちろん、発券部の発行した銀行券の量を一定とした場合のことである」。ところが、右に挙げた数字から、「イングランド」銀行の金庫内での金の堆積と時を同じくして、公衆の間で流通している銀行券の量が減少したということが、引出される。流通のこの収縮はどこからきたのであろうか？　かんたんに、これは交易の減退と事業取引の減少からである。この見方が正しいことは、もしわれわれが「イングランド」銀行の同じ計算書からつぎのことを見てとるならば、疑いの余地がない。すなわち、同行によって割引かれた手形の価値は一八五五年一月二十日には二五、二八二、〇〇〇ポンドであったが、これに反し、一八五五年五月十二日には二三、〇〇七、〇〇〇ポンドに低下した——二、二七五、〇〇〇ポンドの減少——ことである。ところで、同行によって割引かれた手形の価値は、同行が商業界ととり結んだ業務量のもつともたしかな測定器である。しかもこの結論は、「イングランド」銀行が四月二十八日にその利子歩合を四パーセントに引下げていること、つまりその商品——資本——を去る一月におけるよりも二〇パーセントだけ安く提供していることを考慮に入れるならば、より一そう適切であるということになる。そして今日、「イングランド」銀行が利子歩合をこのように引下げた四月二十八日から五月二十二日までに、手形割引のために発行された銀行券の量(*die Masse der für Wechsel-diskonto ausgegebenen Noten*)はふえずにへっている。——このことは、現在の景気のもとでは資本は四パーセントでさえも販路がないという証拠であり、利子歩合の低下は資本のより大きな供給に帰せられるべきではなく、ひとり(*nur*) 商工業企業にとつてのより小さな需要に帰せられるべきであるという証拠であり、最後に、「イングランド」

銀行の地下室にある金屬保有高の増加は遊休していて目下利用しえない資本の増加にすぎない (mur) という証拠である」と。

このようにマルクスは、「流通している銀行券」が収縮していることやバンク・レートの引下げにもかかわらず、「割引手形」が減少していることから見て、目下の「金融市場の引緩み」は「事業の停滞およびそれと結びついている資本にたいする需要の減退」をあらわしているものであって、論者のいうように「恐慌は終結に達し、商工業はふたたび上昇線を辿っている」ということをここから引出すのは誤りである、と論じている。しかし、一八五五年の當時、結論として事実マルクスのいうように情勢が事業停滞であったかどうかは別として——おそらく、逼迫は引緩み、小康状態となったが、なお事業停滞、といったところであったであろう——、右のマルクスの論の進め方のなかには若干の無理が——また事実関係についてもこのときは見逃していたのではないかと思われる点が——あるように見受けられる。本稿はマルクスがどういうことを述べているかを見るのが主眼であって、その記述の当否について立入って論じることを目的としているものではないが、つぎにすこし記しておく¹⁰⁾。

(10) リヤザノフは巻末の「解説と註釈」のところでこの論文「金融事情」についてつぎのように記しているが、これは一部は適切であり、一部は適切でない、と考えられる。すなわち、「マルクスはここでもまたアメリカおよびオーストラリアからの異常に大きな金流入を看過している」「ここでも」といっているのは、前掲一八五二年十月十五日の付の「迫りつつある商業恐慌」のなかでもそうであったが、ここでもまた、という意味であろう。スキのところではリヤザノフがマルクスの「誤り」とし、後年「資本論」で訂正されていると見ているのはかならずしも当たっているとはいえない、ということについては本誌第十一卷第二号の「一八五七年恐慌」(註(17)参照)。この金流入はまさに五月二十二日から二十九日にいたる週には八七〇、〇〇〇ポンドの額に達した(五月二十二日はマルクスのいま見ている論文の執筆日付に当る。ここで執筆日後の週の流入数字

を挙げてもあまり意味がないように思われるが、こういうようにまさにこの頃の週にも流入があったのだ、というようにしているのであらうか。それゆえ、割引率のあらたな引下げが生じたのだ（割引率の引下げは五月には三日に、六月には十四日に行われているから「あらたに」はこれを指すのではなく、一八五五年春以来の引下げを一般に指しているのであらう）。また流通銀行券の減少は、なんら事業取引が減少していることの証拠をなすものではなかった。後年マルクスはかれの誤りを訂正し、また同じくピール銀行条例の批判も理論的により精密に仕上げた。「そしてリヤザノフについては『経済学批判』の「流通手段および貨幣にかんする諸学説」のところ、ならびに『資本論』第一巻の貨幣論と第三巻の第三十三—三十五章のところに当るページを指示している。しかし——この指示がどういう意味なのかはつきりしないが——、流通銀行券の減少は事業取引の減少を意味するということは一般的には妥当なことであって、ここで指摘さるべきことは、当時の事実関係について見逃しがあったのではなからうかという点であらう。——リヤザノフが上のようにいつているのも、この当時においては、という含意であったのかもしれないが。また、上でピール条例云々といっているのは、同条例の解説、批判にかんするかぎりここではなにも問題はないので、解せないことである』（Gesammelte Schriften, Bd. I, S. 524）。

二

まず論の進め方についていうと、問題として一八五五年一月二十日から五月十二日の間にイングランド銀行の金保有高が三、八八三千ポンド増加し、利子率が五パーセントから四 $\frac{1}{2}$ パーセント、さらに四パーセントに下ったということから、これを「金融市場の引緩み」と見ることにマルクスも異論はなかったのであらうから、なにはともあれまず、金融逼迫が解消していることはマルクスも卒直に認めるべきであらう。つきに、この金融緩慢が貸付資本の供給が大きいためか、需要がすくないためかということであるが、右のような金保有高の三、八八三千ポンドの増加——これが「準備銀行券」つまり銀行部保有銀行券の増加三、九五四千ポンドの大部分を占めている——は供給の増大にはかならないのであり、他方、割引手形が同じ期間に二、二七五千ポンドの減少を示していることは

需要の減少であるにちがいない。一方で供給が増大し、他方で需要が減少しているのである。したがって利子歩合が貸付資本の供給と需要とによって決定されるとすれば、「利子歩合の低下」は「ひとり」「より小さな需要に帰せられるべきである」というのは片手落であるとされねばならないであろう。そして供給増大のファクターの方が数字上も大きいのである。そのうえ、イングランド銀行のバンク・レートは、銀行部保有銀行券——つまり銀行部の現金準備——の増減を基準として上げ下げされていたのであるから、「より大きな供給に帰せられるべきではなく」とはますますいいがたいことになるであろう。つぎに、マルクスは「イングランド」銀行の金庫内での金の累積は「事業の停滞およびそれと結びついている資本にたいする需要の減退」という「原因」をもちうるものであり、「このたびは」これが金保有高増大の「真の原因」である、といっているのであるが、「事業の停滞」によって流通銀行券が収縮し、銀行部保有銀行券が増大するとしても、金保有高は——ことに、銀行部での流通金属鑄貨の収縮を別として発券部の金保有高をとり出してみれば——これによって増大することはないのであろう。「金属保有高の増加は遊休……資本の増加にすぎない」ことはたしかであるが、「金属保有高の増加」の「原因」が「遊休資本の増加」によるものとはいえないのである。こういう点では、リヤザノフの見てるように「マルクスは……大きな金流入を看過している」とされても——マルクスはカリフォルニアおよびオーストラリアからの金流入を一般にはけっして「看過」していないわけではないのであるが——いたし方ないであろう。また、「割引手形」の大きさは「同行が商業界ととり結んだ業務量のもつともたしかな測定器」であることはたしかであるが、しかしこの「割引手形」の増大がかならずしも事業の繁栄、拡大を反映するものでない——イングランド銀行の「割引手形」はむしろ逼迫期に最高となる——のと同様に、「割引手形」の減少は「事業の停滞」、縮小をかならずしも反映するものとはいえないであろう。そしてこの一八五

五年三月に「恐慌は日ごとに強力性および普遍性をましてきている」という観測をしていた見地からすれば、むしろ、「割引手形」の減少は事態が小康をえてきたものと——たとえまだ「上昇線」は辿ってはいなく「停滞」にあるとしても——読みとられるべきであつたであらう。また、ついでにいえば、マルクスは「手形割引のために発行された銀行券の量はふえずにへつている」という文章を書いているが、「手形割引」の量の増減と流通銀行券の量の増減とはまったくことなるということは、マルクスの大いに興味をもっていた問題のほずであるし（本誌前号、「一八五七年恐慌」の註（10）参照）、また銀行券は預金引出しによつても流通界へ出てゆくのであるから、ここでこう書いてゐることは不審に感じられる。

ところで、おわりに、事実關係についてこのとき見逃しがあつたのではなからうかという点であるが、それは、流通銀行券の「収縮」が「交易の減退と事業取引の減少から」くるということは一般的にいふことであるが、それには銀行券の流通条件の一定が前提となる、ということである、——流通銀行券総額が二十万ポンドほどのさい一八五五年一月二十日から五月十二日の間の「収縮」が十万ポンドたらずという、ここから右のような判断を引出すにはかなり小さいものであつたことはいま措くとして——。この問題については一八五八年八月十日付論文「商業恐慌と貨幣流通」¹¹⁾（『トリビュン』一八五八年八月二十八日号所載）のなかで「驚嘆すべき現象」としてつぎのように考察されている。

(11) M. Rubel の *Bibliographie* 174 (La loi de banque de Robert Peel et ses conséquences) という表題のもとに『ニューヨーク・トリビュン』一八五八年八月二十三日号および同年八月二十八日号所載の二つの論文を掲げ、ロシア語版全集に収められているとしている（P. 143）。上の「商業恐慌と貨幣流通」（大月選集、第九卷、六四—七〇ページ）はこの第二論文に当り、また大月選集、第九卷、一二三—九ページの「一八四四年のイングランド銀行条例の効力停止」（一八五八年八

月六日付）がこの第一論文に当ることとなる。

一八五七年十一月の恐慌後、イングランド銀行条例にかんする下院委員会が設けられ、この委員会は翌一八五八年七月一日付で『報告書』を出した。右の第一論文はこの『報告書』を論評したものであったが、この第二論文もこれを材料として書かれたものである。このあと、同年九月十四日付の「イギリスの商業と金融」〔『トリビュン』一八五八年十月四日号所載、大月選集、第九卷、七一七ページ〕も同じく『報告書』を論評したものである。これはリハーベルの *Bibliographie* 及び *British Commerce and Finance* とあれ、これもロシア語版全集に収められているとしている（P. 144）。この「イギリスの商業と金融」のはじめにマルクスはつぎのように述べている、——「われわれは、下院によって任命された一八五七—五八年の恐慌調査委員会の報告書を検討して、まず第一に、イングランド銀行にかんするサー・ロバート・ピールの条例の有害な傾向を曝露し、第二に、発券銀行は自分勝手に紙券流通高を増減することにより価格の一般的水準に影響を与えうるかのようにいう誤った思想を論破した。だがそれなら、いったい恐慌の真の原因はなんであったか、という問題が生じるであろう」云々と。ここで「第一」といつているのがさきの第一論文であり、「第二」といつているのが第二論文のことである。

ちなみに、マルクスは一八五八年九月二十一日付エンゲルス宛の手紙のなかでこれらの論文に言及してつぎのようなことを書いている。——「ときに！ トリビュンで面白い目にあつた。最近の恐慌についての委員会報告書の批判としてばくはいくつかの論文をトリビュンに送つた。それをトリビュンは社説として掲げた。とくに銀行制度や通貨、等々にかんするものだ。ところで『プリオニスト』と自称する一銀行家がトリビュンに一文を寄せて、（一）これほど包括的に対象全体を要約したものはない、等々と述べ、（二）しかし種々な難点を挙げ、そして編集者にたいして自分に答えることを求めた。それでかわいそうに奴さんたちは答えねばならなかったのだが「当時『トリビュン』においては、マルクス、エンゲルスの論文は署名入で掲載されていなかった」、じつにへまなことをやつた。だがこういう事件はよくには都合がよい」。

「一八四四年から一八五七年までの期間に連合王国の全商業はほぼ三倍となり、イギリスの輸出は数字が示すように、最近十カ年間に二倍となった（「一八四五年六〇百万ポンド、一八五七年一二二百万ポンド」）。ところが商業のこうした大きな増加と時を同じくして、イングランド銀行の銀行券流通高は実際に減少した（「一八四五年二〇、七二二万ポンド、

一八五七年一九、四六七千ポンド」、またいまでもひきつづき徐々に減少している。……／＼輸出が総額六千二百四万五千ポンドだけ増加しているのと時を同じくして、銀行券流通高は百二十五万五千ポンドだけ減少した。しかもこれは、イングランド銀行にかんする一八四四年の条例にもとづき同一期間内に同行の支店数が増加し、同行と競争している地方発券銀行の数が減少し、同行の銀行券が地方銀行にとって合法的な支払手段となったにもかかわらず、そうなのである。「この最後の句の意味はよくわからないが、一八四四年条例実施から一八五五年までに五十二の地方発券銀行が銀行券発行をやめたので、一八五五年十二月十三日に、それらの銀行の自己銀行券発行権限額七一二、六二三ポンドの三分の二——イングランド銀行はそういうさい、同行のもともとの一千四百万ポンドの無準備発行額に加えて、右の三分の二だけ無準備発行額を増加することができると規定されていた——に当る四七五、〇〇〇ポンドまで発行を増加することを認められた(Macleod: op. cit. vol. I, p. 149)」。ひとは、豊富なあたらしい泉「カリフォルニアおよびオーストラリア」から流入した金鑄貨が「金が流入し、それが金鑄貨となつて」イングランド銀行の銀行券の一部を駆逐し、以前にこれらの銀行券によって占められていた貨幣流通の水路をみたしたのだというかもしれない。なるほど、一八五七年当時のイングランド銀行の総裁ウェゲリン氏は、下院の委員会で最近六カ年間にける金流通の増加は、もつとも權威ある人によつて三〇パーセントと見積られていたと言明した。そしてかれ自身は、「金の」全流通総額が現在五千万ポンドに達していると考えた。¹³⁾ところが金鑄貨のこうした増加は、紙券流通高の減少とはほとんど関連がなかったのであつて、そのため実際に、五ポンドおよび十ポンドという小額の銀行券——小売商業や売手と買手との間での取引で金鑄貨にかわりうる唯一のもの——の数量は、まさに金属流通も増加していたそのときに、増加をとげたのである。¹⁴⁾「一八四五年九、六九八千ポンド、一八五七年一〇、六五九千ポンド」。……／＼このようにして、減少は、二百ポンドから一千ポンドの額面の高額銀行券について

生じたものである。だが、これらの銀行券は、本来の意味での鑄貨がほとんど遂行しないような国内流通の機能を果たしているものである。「だからこの減少も金鑄貨が増加したためではない、というわけである」。これら高額銀行券の利用が事実だけでなく節約されたかは、商業取引の拡大や、価格の一般的騰貴や、小額紙券流通高の増加にもかかわらず、銀行券の流通が全体として徐々に減少したことにあらわれている。二百ポンドないし一千ポンドの額面の銀行券の数量は一八五二年の総額五百八十五万六千ポンドから一八五七年には三百二十四万一千ポンドにまで減少した。¹⁵⁾／グ
ニイト・ブリテンの紙券流通でのこのあたらしい要因は、ロンドンの株式銀行と個人銀行との間の競争が増大した
とと、さらにこれらの銀行（ロンドンの株式銀行）が預金に利子を支払うようになったために巨額の貨幣がこれら銀行
の手中に蓄積されるにいたったことによってひきおこされたものである。「これを「要因」であるとするのはおかしい。

Report」の記述を誤って解したのであろう」。ロンドンの個人銀行業者たちは、……一八五四年六月八日にいたって株式
銀行が手形交換所に加盟するのを許すことに同意することを余儀なくされ、その後まもなく、最終的決済を行う場所
はイングランド銀行に移された。それ以後日々の決済は、種々の銀行がこのイングランド銀行にもっている勘定での
振替によって行われるようになったので、これまで銀行業者が相互決済に使用していた巨額の銀行券はその用途の大
半を失い、そのためいちじるしく流通から排除されるにいたった。¹⁶⁾その間、ロンドンの株式銀行の預金は、公表され
た報告書に見られるように、一八四七年の八、八五〇、七七四ポンドから一八五七年には四三、一〇〇、七二四ポ
ンドに増加した¹⁷⁾¹⁸⁾」（傍点―三宅、大月選集訳、第九巻、六五―七ページ）。

このように、一八四四年から一八五七年にいたる期間に輸出が二倍となったというように商取引はいちじるしく増
大したにもかかわらず、イングランド銀行券の流通高は——金属鑄貨および小額銀行券は金属鑄貨の流通増大と並ん

でその流通は増大したけれども、高額銀行券の流通が減少したため——総額として減少を示した。一般的動向として当時こうした動向があったことが、——加えて註(13)(14)に見られるように金貨鑄造額および流通小額銀行券は一八五五年には前年よりも増加していることが——、さきの論文「金融事情」では考慮に入れられていないと見受けられるのであって、このことは論議の前提をなす事実関係の認識に若干の不備があったと看做されねばならぬであらう。

(12) ここで以下に掲げるマルクスの記述は上記委員会の『報告書』本文——証言部分でない本文部分——に大きく拠っているものであって、上掲のことはこの「Report」ではこのように記されている。——70.「これは記述の項番号」The effect has been so great that, notwithstanding the great increase of trade, the whole amount of bank notes has actually diminished since 1844, and, under the Present law, still continues gradually to decline. (D. M. Evans; The History of the Commercial Crisis 1857—58, and the Stock Exchange Panic of 1859, 1859, p. 89. 同書に於ける「Report」本文が全文収録されているので、本文原文の引用は以下これに依る)。

(13) ここは「Report」ではこのように記されている。——3. ... Mr. Weguelin, a member of the Committee, and then Governor of the Bank, stated to the Committee of 1857, that this increase was estimated by those in whose judgment the Bank Directors placed the greatest reliance, at 30 per cent. in the six years then last elapsed. The total gold circulation is believed by him now to amount to nearly £50, 000, 000. (Evans; op. cit. p. 59).

なお、マルクスは一部既掲の論文「製造業と商業」(『トリビュン』一八五九年九月二十三日号所載)の後半で、この金鑄貨の流通増大についてよりくわしい分析をしている(大月選集訳、第九卷、二〇一—四ページ)。すなわちここでは、「国民の間に流通している硬貨の数量については、国立造幣局 [Royal mint] の事業活動にもとづいて十分に確実な結論を下すことができる」「これは流通硬貨の数量ではなく、その数量の変動、増減というべきところであらう。なお、この一八五九年はじめて刊行された『経済学批判』註七三に引用されている一八五八年七月十日号『エコノミスト』の記述参照」として、一八四四

年から一八五八年にいたる十五カ年間のロイヤル・ミントにおける金、銀、銅貨の鑄造額の表を掲げ、「新」産金国の影響が感じられない」一八四四―五〇年を「第一期」、「あたらしい源泉からの金の急激な流入を特徴としている」一八五一―五八年を「第二期」と分け、第一期の年平均の鑄造額は三、六四三、一四四ポンドであったが、第二期のそれは七、一三七、七八二ポンドであったとし、つぎのように述べている、——「つまり、グレイト・ブリテンの金属流通は、金のあらたな輸入の影響下にあった期間内には、ほとんど一〇〇パーセント増加したのである」「一〇〇パーセント増加したのは鑄造額であり、金属流通が一〇〇パーセント増加したことにはならない。これも、増加額が従来の増加額に比し倍増した——もちろん鑄造額がそのまま増加額とはならないが——とでもいなければ正しくないであろう」。このことはなるほどブリテンの国内商業の発展にたいするカリフォルニアおよびオーストラリアの影響を示しているが、しかし金属流通が直接あらたな金の流入の影響下で増加したと結論することは、まったく正しくないであろう。金鉱発見の前後の両期間の個々の年を比較してみると、逆のことが証明される。……したがって、貨幣の形で流通する金の量は、金塊の輸入によって決定されなかつたわけである。だが輸入された金の大部分は、平均して、第二期を通じて、国内の流通に吸収された。なぜなら、商工業活動が一般に拡大されたからである。しかしまたこの拡大は、相当程度、あらたな産金国の影響に帰することができ、」と(傍点―三宅)。附言しておく、この金産出増加にたいする評価は、従前の評価に比して注目すべきものである。

ちなみに、この論文で掲げている表によると、造幣局での金貨の鑄造額は一八五四年には四、一五二、一八三ポンド、一八五五年には九、〇〇八、六六三ポンドと、一八五五年には「収縮」ではなく増加を示していることは、さきの「金融事情」での銀行券流通高の「収縮」——「事業の停滞」にかんれんして注意される。

(14) ここは „Report“ ではつぎのように記されてゐる、——4. With regard to bank notes, it is interesting here to observe, that in the smaller denominations, those, namely, which enter most into the retail transactions of the country, the number has considerably increased, concurrently with the increase of the gold circulation above referred to. The £5 and £10 notes of the Bank of England, which in 1851 were £9, 362,000, had risen in 1856 to £10, 680,000. (Evans; op. cit. p. 59).

ちなみに、マルクスがここで掲げている表——これは „Report“ 本文の項番号 69 の表から引かれてゐるものであるが——によると、五ポンドおよび十ポンド銀行券流通高(年平均)は一八五四年には一〇、五六五、〇〇〇ポンド、一八五五年には

一〇、六二八、〇〇〇ポンドと、これまた金属流通と同様に一八五五年には「収縮」ではなく増加を示していることが注意される。そして、それにもかかわらず、イングランド銀行券全体（年平均）としては——右“Report”の表によると——一八五四年二〇、七〇九千ポンド、一八五五年一九、七九三千ポンドと、百万ポンド近く減少していたわけである。

15) この点では „Report“ に於いて *200* の *2* の位は *1* に *5* である。At the same time, for a reason which will presently be noticed, a great diminution has been observable in the use of notes from £200 and upwards. . . . 7. The diminution in the use of these notes is shown by the following figures : — (五十二と一八五七年の数字が掲げられてゐる) (Evans; op. cit. pp. 59—60).

16) じじじ “Report じじじのじじじのじじじ” —— 7. While this expansion of trade was in progress, and the precious metals received this remarkable addition, a new feature in the banking business of the country was observable. The joint-stock banks in London entered more and more into the competition with the private banks, and by their practice of allowing interest on deposits, began to accumulate vast amounts. On the 8th June, 1854, the private bankers of London admitted the jointstock banks to the arrangements of the clearing-house, and shortly afterwards the final clearing was adjusted in the Bank of England. The daily clearances are now effected by transfers in the accounts which the several banks keep in that establishment. In consequence of the adoption of this system, the large notes which the bankers formerly employed for the purpose of adjusting their accounts are no longer necessary (Evans: op. cit. pp. 59—60). じじ On the 8th June, 1854 以下のじじじは『資本論』第二巻 S. 568 じじのじじ——ドイツ語訳で——掲げられている。なお、H・D・マクラッドは、手形交換の最終的決済がこのようにイングランド銀行の帳簿上の振替によることになったため約二〇〇千ポンドが、また株式銀行の手形交換所加盟によって株式銀行が従来の代理交換のさいに用意しておく必要のあった額約五〇〇千ポンドがいらなくなったとし、既述の一八五五年十二月の無準備銀行券発行限度の引上げ四七五千ポンドと合せて、計一、一七五千ポンド、これだけ事実上イングランド銀行は一八四四年以来発行権を増大したことになる」と述べている (Macleod: op. cit. vol. II, pp. 149—50)。それにもかかわらず一八五七年十一月には一八四四年の条例を停止せざるをえなくなったわけである。

17) いざ、"Report" だぞ、おののけいふに——8. Meanwhile the joint-stock banks in London, now nine in

number, have increased their deposits from \$8,850,774 in 1857, as shown in their published accounts (Evans; op. cit. p. 60). マルクスはこの「商業恐慌と貨幣流通」において、もつて「銀行が商業の一般的方向と価格の上に与えたかまたは与えることのできた影響」というのは、疑いもなく、預金の操作、すなわち信用取引によって実現されたものであつて、過度の銀行券発行によつて実現されたものではない」(大月選集訳、第九卷、六七—八ページ)といつてゐるのである。

右の Meanwhile 以下のところも『資本論』第三卷第五篇のなかで引用されてゐる。—— S. 541. ここでつゞきに備忘的に附記して置くと、この以下はつぎのやうに記されてゐる。—— The evidence given to your Committee leads to the inference that of this vast amount, a large part has been derived from sources not heretofore made available for this purpose; and that the practice of opening accounts and depositing money with bankers has extend to numerous classes who did not formerly employ their capital in that way. 『資本論』での引用ではこの文中の *the* *von* *den* *und* *daß* *die* *Gewohnheit*, *eine* *Rechnung* *beim* *Bankier* *zu* *eröffnen* *und* *Geld* *bei* *ihm* *zu* *deponieren*, *sich* *ausgedehnt* *hat* *auf* *zahlreiche* *Quellen*, *die* *früher* *für* *diesen* *Zweck* *nicht* *benutzbar* *waren*; *und* *so* *vielfache* *Wiederholung* *eingetreten* *ist*. 長谷部訳ではこのところを「」に挿み、「この角括弧内の句は各版に共通して存在するが、大体において括弧の直前の一句の言葉と直後の一句の言葉との混合から成りたつており、削除すべき誤植だろうと思われる」という訳者註を入れておられるが(青木版、第三部下、七〇三ページ)、事実、長谷部氏のこの推測どおりであるわけである。また、この『報告書』本文の項番号8.のなかの右のあとの部分は『資本論』第三卷の S. 519 でも引用されており、S. 519 で引用されている文章の冒頭は、S. 541 で引用されてゐる文章のおわりの方と重なつてゐるが、この S. 519 でははじめの引用符に対応する閉じの符号が欠けてゐる。この第八号は、„I speak of deposits with the brokers“と云ふ Mr. Neave の証言で終つており、『資本論』ではここに『報告書』からの引用を閉じるために閉じの符号が二つ記されねばならなかつたのであるが、その一つがつけ落されてゐるのである(筆者稿『貨幣信用論研究』二二〇ページ、註(8)参照。なお、長谷部訳の青木版では、閉じ符号がないところからこの S. 519 ではじめの引用符の方をたいして、「この引用符は削除されるべき誤植であろう」という訳者註をあらたにつけておられるが、この訳者註の方は見当がはずれてゐたわけである)。なお、S. 541—2 に引用されている『報告書』の記述は、インスティトゥート版では Nr. 52. という項番号が附記されてゐるが、この項番号は 54 の誤りである。

(18) 上掲の「商業恐慌と貨幣流通」のなかで扱われている同じ問題は、『資本論』第三卷第三十三章「信用制度下の流通手段」のところで、一八四四年から一八五七年にいたる間の五—一〇ポンド券、二〇—一〇〇ポンド券、二〇〇—一〇〇〇ポンド券それぞれについての数字を示すところの右「Report」本文項番号69所載のくわしい表を掲げて、要約的に考察されているが、『資本論』のこゝでもこの表について言及されている。なお、この銀行券流通高の額面別の表は、カウツキー版では「この表からは若干のマルクスの書誤りとオリジナルの誤植とがとり除かれている」としてマイスナー版を大きく訂正したものが掲げられており(S. 55)、長谷部氏の訳書では「カウツキー版を参考として、マイスナー版およびインスティテュートの数字の誤りが数カ所訂正されている」(訳者註)としてこのカウツキー版と同じ数字が掲げられている。他方、このイ版の数字は「Report」の数字を採ったようであつて、Evans の書所収の「Report」での数字と完全に一致しており、マイスナー版の誤植が五カ所ほど訂正されているものである(そしてカ版の数字との間に九カ所ほどちがいがあつた。これがカ版で「オリジナルの誤植」としているものに当るわけである)。

さて前に戻つて、前記のようにマルクスは一八五五年五月中旬「金融事情」なる一文を書き、一八五五年一月の逼迫から目を追つてイングランド銀行の金属準備が増大し、バンク・レートが五パーセントから四 $\frac{1}{2}$ 、四パーセントと引下げられてきている情勢について、この「金融市場の引緩み」は事業停滞によるものであることを論じたが、イングランド銀行の金属準備はほゞその一カ月のちの翌六月二十三日を頂上として、六月末からこんどは逆の減少に転じていった。六月十四日に三 $\frac{1}{2}$ パーセントにまで引下げられていたバンク・レートは反転して上昇を辿り、九月六日には四パーセント、同十三日には四 $\frac{1}{2}$ パーセント、同二十七日には五パーセントと年初の五パーセントにふたたび戻り、さらに十月四日には五 $\frac{1}{2}$ パーセント、同十八日には六十日手形にたいしては六パーセント、九十五日手形(上乗のバンク・レートはすべてこの九十五日をこえない手形にたいするレート——最低率——)にたいしては七パーセントと

急速に引上げられていった。¹⁹⁾この六、七パーセントは一八四七年以来はじめて示した高さであったが、翌一八五六年の五月まで、長期にわたってこのレートが持続けられた(以後ふたたび一八五六年秋にいたるまで少々引緩んだ)。一八五五年六月二十三日にはイングランド銀行の金保有高は一八、一六九千ポンド、銀行部の保有銀行券は一一、八八七千ポンドにのぼっていたが、年末の十二月二十七日には金保有高は一〇、二七五千ポンド、保有銀行券は六、九九三千ポンドにまで下るといふ大きな変化であつて、このときの動き中の最低一八五六年四月二十六日には金保有高は九、〇八一、六七五ポンドになつた(Macleod; op. cit. vol. I, p. 147—50, Clapham; op. cit. vol. I, p. 429, Evans op. cit. p. 61. — „Report“, No. 12.)。

(19)「委員会の方々は、利子率のきわめて急速なこの上昇は融資にたいするまた地金の輸出にたいする商業界の需要によつてひきおこされたものであるが、それとともに東方の軍隊を補給するための地金にたいするかなりの需要が同時に生じていたことを、認められるでしょう」(ウェゲリン、*„Report“* No. 12. — Evans; op. cit. p. 61)。「一八五五年のとくに悪かつた収穫が、戦争第二年の過重と結びついたため、一八五五年十月から一八五六年五月にいたる長期にわたつて六パーセントが唱えられた、——市場レートはこれより $\frac{1}{4}$ から $\frac{1}{2}$ パーセント高かつた——。おそらく、もしイングランド銀行がオーストラリアからの金流入をもつて一八五五年六月に三 $\frac{1}{2}$ パーセントまで下げるようなことをしなかつたならば、四ヵ月後に六パーセントまで進めることを要しなかつたであらう」(Clapham; op. cit. vol. I, p. 223.)。

このように、一八五五年秋の逼迫はかなりのものであつたと見受けられる。しかしマルクスは、既掲のよゝにのちに一八四七年恐慌以来一八五七年にいたる十年間のバンク・レートの動きを跡づけている論文のなかで「恐慌はすでに一八五五年十月に到来しなければならないところであつた」と述べているのであるが、一八五五年六月末以来のこの金融逼迫の間においては、この金融逼迫自身についても、またイギリス経済の動き一般についても、ほとんどな

も書いていない。『ノイエ・オーダー・ツァイトゥング』にも『トリビュン』にも、紹介されているかぎりではなにも書かれていないし、また往復書簡でも、一八五六年秋の逼迫のさいにはこれについてのいくつかの手紙があるが、一八五五年秋—五六年春の事情については、なにも語られていない。²⁰⁾なお、附言しておく、『グルントリッセ』のなかで編者が記している註によると(S. 1044, S. 1073)、一八五四年十一月から五五年一月の間に「貨幣制度、信用制度、恐慌(Geldwesen, Kreditwesen, Krisen)」と題する原稿——相当の分量のものらしい——が書かれているとされているが、これは未発表なので利用できない(この執筆時期についてはのちに触れるようにすこし——もっとあとのものではなからうかという——疑問がある)。

(20) ただ、一八五五年七月十七日付エンゲルス宛の手紙のなかでアメリカ合衆国について、「農耕および産業の恐慌(農工業恐慌) die Krise in Ackerbau und Industrie)」と述べていること、および一八五六年二月十二日付エンゲルス宛の手紙のなかで、「新聞に書くことはいま非常に重荷である」というのは、イギリス自身ではなにごとも生じていなく、経済事情における転換(Wendung)はまだ一こうにはつきりしていないからだ。この点での決定的なものはいまのところ取引所投機(Börsenswindelen)であるが、これには必要な「決定的なものとなるために必要な」材料が欠けている」といっていることが見受けられるにすぎない。